

機関番号：11301
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008 ～ 2010
 課題番号：20720165
 研究課題名（和文） 18～19世紀における奥羽両国の地域間交流と地域形成に関する社会史的研究
 研究課題名（英文） Studies of regional social history on the formation and inter-regional exchanges in the 18-19th century Oou area
 研究代表者
 佐藤 大介 (SATO DAISUKE)
 東北大学・東北アジア研究センター・助教
 研究者番号：50374802

研究成果の概要（和文）：

本研究では、近世から近代移行期の奥羽両国における地域間交流を、地元に残された古文書史料の調査分析を通じて解明した。その結果、これまで存在が確認されていなかった新たな峠道の整備事例を確認し、その動きが地域のリーダー層を中心に国境や領主支配領域を超えた地域間連携によって実現していたことを明らかにした。さらに、このような民間の交通網整備が明治初年の東北地方の運輸政策の直接の前提となったことを解明した。

研究成果の概要（英文）：

In this study, inter-regional exchanges from the early modern transitional Oou area were elucidated through analysis of research in local archives left on private. As a result, the development of confirmed cases did not slap a new existence so far been identified, had been achieved through regional cooperation and the lords ruled over the area around the border layer is a regional leader of the movement Revealed. Furthermore, we clarify the assumptions that were the direct transport policy development in the Tohoku region in the early Meiji Period such private transportation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：地方史

科研費の分科・細目：

キーワード：地域史、地域間交流、交通史、地域リーダー

1. 研究開始当初の背景

現在の山形県および宮城県域において、奥羽山脈を超えて展開した地域間交流については、長井政太郎『山形県交通史』（不二出版1975年）に代表される歴史地理学の分野で、18世紀から19世紀にかけて奥羽間横断道路を通じて展開した流通の状況や、通婚・言語

面など生活文化面での共通性について指摘されている。このことは、単に奥羽山脈を挟み近接した地域間で交流があったということにとどまらず、当該期の日本近世史における地域支配の類型において、幕府及び大名の所領が錯綜する「非領国地帯」として位置づけられてきた村山郡東部の山間地帯と、62万石の

所領を有する「藩領国」仙台藩の西部山間地帯との間で、政治体制の違いを越えて地域社会が形成されていたことを示唆するものである。しかし、この点と関連させた地域社会の形成・展開についての実証的な分析は、その素材となる地域史料の発掘も含めまだ十分に明らかにされているとはいえない。

一方、当該期における仙台領および羽州村山郡の地域社会史研究において、奥羽間の領域を越えた交流の実態が明らかにされるとともに、そのことがそれぞれの領域における社会秩序の変化をもたらす重要な要素として認識されつつある。平川新「郡中」公共圏の形成—郡中議定と権力」（『日本史研究』511 2005 年）では、天明飢饉に際し村山郡の村役人層が幕府代官と連携して形成した食糧確保のための地域秩序の評価をめぐって、米持層としての地主商人層だけではなく、少量の米穀を仙台領へ販売する村山郡東部山間地の村落住民の動向に注目し、保護すべき対象でありながらそれを食い破る存在としての政治的な影響力について問題提起している。しかし、この論文は地域政治構造の解明を主眼とする研究であり、政策課題の焦点となった境界領域としての山間地域とそこに居住する人々の米穀輸送や販売の実態を正面から分析したものではない。18 世紀末から 19 世紀にかけて展開した、奥羽両国の支配領域を越えて展開していた人々の生業の実態を明らかにすることは、当該期の地域秩序についての歴史的評価を行う上も必須の研究課題といえる。

岩田浩太郎「紅花商業と東北」（『山形大学公開講座 山形の魅力再発見 報告集』2003 年）は、19 世紀前半から幕末期にかけての山形城下町商人長谷川家の活動を分析する中で、同家の紅花集荷や上方物資の販売が、拠点である村山郡を越え仙台領北部および南部にまで展開し、仙台領の地域市場に強い影響力を持ったことを指摘している。このことと関わって、横山昭男「明治前期における商品流通と輸送路—陸羽横断の諸街道を中心として—」（『山形近代史研究』13・14 1974 年）では、流通史の視点から近代初頭の奥羽間での物資輸送の実態を解明しているが、そのルートとなる奥羽間横断道路の整備について、山形県令三島通庸による関山隧道開削など明治政府主導の経済政策による交通網整備が進展する以前に展開した、明治初年の奥羽両国の地域住民の主体的な道路整備の意義について問題提起を行っている。この動向の背景には、岩田論文で指摘された 19 世紀初頭以降の奥羽間での活発な物資往来をふまえ、経路となった奥羽間の山間村落間で、経済的な利害関係を共有する一つの地域形成がなされる可能性を示唆するものであるが、その具体的な動向と歴史的意義についての評価は依然として課題として残されている。

このような研究状況をふまえ、報告者は名望家たちの奥羽横断道路構想—明治初期の山形・宮城両県における地域振興策をめぐって—（2007 年度東北史学会大会日本近世・近代史部会口頭報告 2007 年 9 月 30 日）において、関山隧道開削以前における奥羽間（宮城県と山形県村山郡）の横断道路構想および開削事業について考察した。ここでは、近世期に最上川水運と西回り航路を通じて上方との経済的な結びつきが強かったとされる羽州村山郡においても、幕末期には仙台領内、さらには東回り海運経由での江戸市場に着目した経済活動への関心が高まっており、明治初年に至り、実現はしなかったものの隧道開削の構想が出現したこと、宮城県側でもこのような村山郡の動向に注目し、奥羽山脈を挟む地域間で連携して道路開削を進めていたことが、明治 10 年代の三島県令など国家による道路開削の前提となったと評価づけた。しかし、報告では宮城県庁文書など行政側に残された史料の分析が中心であり、また史料的な制約から山形県側の動向についての言及が中心になるなど、現時点ではアウトラインを提示したにとどまっている。今後は、現在地元で保管されている、地域側で主体的に活動した有力者の史料発掘を進め、道路整備を契機とする奥羽間での地域形成とその歴史的意義を検討する必要がある。

2. 研究の目的

（1）18 世紀における奥羽横断路を通じた地域間関係の解明

ここでは、18 世紀中後期の時点での奥羽間での地域間交流の実態について、米穀の移送をめぐる動向を中心に明らかにする。米穀については前述した食料確保の問題に加え、村山郡に属する村落の年貢米輸送について、奥羽山脈を越え荒浜経由で江戸に移送するルートの開拓が、山間部の街道沿いに位置する村々によって試みられている。主として公的な側面を持つ物資の移動について、奥羽間でのどのような関係が取り結ばれたのかを解明する。

（2）19 世紀前半における奥羽横断路を通じた地域間関係の解明

この時期は前述した商品輸送に加え、出羽三山への参詣旅行の活発化にともない奥羽山脈を越えた地域間交流が進展してゆく。その中で、経由地となる山間地域の村々が近接する街道を整備し、人や物資輸送を誘致する動きが確認される。このことを事例に、奥羽山脈を挟んで隣接する地域間の関係を解明する。

（3）19 世紀後半における奥羽横断路を通じた地域間関係の解明

課題 1、2 で解明した動向、および申請者の学会報告をふまえ、明治国家の成立を契機に

活発化した、地域主導での新道開削をめぐる奥羽間の地域間関係を解明するとともに、明治国家の近代化政策としての交通網整備への規定性について考察し、近世期の到達点としての歴史的意義を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 文献調査

研究のフィールドとなる地域における既刊の資料集の中から、奥羽横断道路および奥羽間の地域交流についての関連事項をピックアップしてゆく。

あわせて、山形県および宮城県の公的機関に保存されている未刊行の古文書資料について、本研究課題と関連するものを対象にデジタルカメラで撮影し、画像データを用いて内容を解説・分析してゆく。

(2) フィールドワーク及び史料所在調査

実際に奥羽横断道路が通じていた現場において、地域の人々から関連する事項について聞き取り調査を行う。

あわせて、地元で未整理のまま保管されている、奥羽横断道路および奥羽間の地域交流に関連する古文書資料の所在調査を行い、その保全を行った上で整理と分析を進める。

上記については、NPO 法人宮城歴史史料保全ネットワークとの協同で、適宜仙台地区の大学院生の協力をえて行う。

4. 研究成果

(1) 19世紀災害下における地域間交流の実態解明

天保3-4年の羽州側、同7-8年の奥州側の飢饉にともなう街道での物資移動統制の状況から、個別地域の生存確保のため奥羽両国が対立する状況を解明することが出来た。

また、そのような状況を前提にした仙台藩政の動向を、従来の研究ではまったく注目されていなかった仙台藩主および藩官僚層の動向から分析し、地域間交流を通じた藩政の変容について具体的に明らかにした。

上記の点については、仙台藩校養賢堂の算術指南役であった別所万右衛門の記録から解明された。従来全く利用されていなかった資料について、全文翻刻を行った。そのことにより、蓄積の少ない仙台藩に関する通史的な基礎史料を学会及び地域社会に提供し、今後の地域史研究に資することが出来た。

(2) 地域間交流を踏まえた19世紀仙台藩地域リーダー層の社会活動とその歴史的意義

仙台藩領において、特に18世紀後半以降に上記のような地域間交流などを背景に出現する地域リーダー層の動向について明らかにした。

全体の傾向としては、18世紀後半以降の仙台藩献金制度の分析を通じて、彼らへの社会的責任の要求を背景に、彼らが藩政へ具体的に関与してゆく動向が、幕末期仙台藩政に一定の規定性を与えるという展望を示すことが出来た。また、同時期のこのような動きに対応する藩官僚の動向を分析し、儒教思想を応用した社会資産の均分化や、市場経済を統御するためのあらたな社会システムの構想の存在について明らかにした。

個別の事例研究としては、桃生郡名振浜(石巻市)の永沼丈作の天保飢饉前後の動向を解明した。北上川河口の戦国期からの旧家であった永沼家は、19世紀初頭から海運業などにより中興した。そこでの資産蓄積をはき経に、動向を背景に、永沼丈作は天保飢饉の救済に積極的に関与する。さらには藩の捕鯨仕法に献策するが、それはアメリカ船の日本沿岸接近を背景にした動きであった。天保末の献策は藩、地域双方に受け入れられなかったが、幕末仙台藩での海防策の議論の中で注目され、政治的立場を浮上させたのである。

また、最上海道の沿線に位置する加美郡小野田本郷(加美町)の池田伊兵衛は、天明飢饉後の地域復興を、地域間交流に基づき実践していた。儒学書に記された政治理念に基づき、羽州や南部領からの移民を招請する一方、備荒貯蓄や救済基金を創設した。仙台藩におけるこのような地域リーダーの動向を明らかにしたのは本課題が初めてであり、さらに19世紀初頭に関東などで見られる農村復興策の先駆的な動向をなす事を明らかにした。

(3) 明治初年における奥羽両国間の新道開削事業の実態と歴史的意義の解明

明治初年の奥羽両国間を結ぶ交通網再編については、従来の研究では明治政府や山形県令三島通庸による政府主導の事業と位置づけられていた。

これに対し、本課題における新たな史料発掘と分析に基づき、幕末期から地域名望家を中心とする地域住民主導の太平洋海運と内陸交通の事業の存在を明らかにすることができた。具体的には、黒川郡吉田村(宮城県大和町)と村山郡観音寺村(山形県東根市)間の新道、二口峠(仙台市・山形市)の改修、村山郡猪野沢村(東根市)と宮城郡新川(仙台市)を結ぶ猪野沢新道の開削事業、および明治3年(1869)に山形町の住民が提案した笹谷峠のトンネル開削構想を明らかにした。

これらに関与した地域リーダー層の動向としては、二口峠と猪野沢新道について明らかにした。前者については、仙台藩の蔵元商人であった大竹徳治と、宮城郡石浜に拠点を置く廻船商白石広造の動向に着目して明らかにした。大竹は幕末から戊辰戦争期の仙台藩で、下級藩士層とともに洋式軍艦を用いた藩によ

る特産品交易事業に関与し、羽州からの物資移送も含めた流通網を形成していた。白石は明治維新後の山形県による殖産興業策に関与しており、大竹が宮城県側、白石が山形県側に出資して新道開削が実現したのである。

猪野沢新道については、通称「小山田新道」という呼称が地域に伝えられているが、小山田正見・為吉の兄弟が開削に関与していた。小山田家の開削は、奥羽両国間の馬車通行を可能にするための道路事業であったが、この事業は大久保政権下で山形県令に赴任した三島通庸により国家事業として位置づけられたのである。

以上の分析から、明治16年(1883)に開通した関山隧道の開削事業は、実は地域側の主体的な交通網整備の到達点として位置づけられることを明らかにした。すなわち、これらの事業こそが、明治政府による交通再編政策の歴史的な前提となったことを解明し、当該期の奥羽両国の歴史像を転換する地域の主体性を提示することができた。

(4) 研究対象地域における歴史資料保全

今回研究対象となった地域は、約37年周期で発生する宮城県沖地震の想定被害地域でもあった。研究期間の3年間で、地域の個人宅7件に所蔵されていた古文書史料の撮影と保全を実施した。

以上のデータは所蔵者に加え、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク事務局、および関係自治体に提供し、研究期間終了後の継続的な利用に供することができた。

また、研究期間中の2008年6月に岩手・宮城内陸地震が発生した。本研究課題は山間部の交流を課題にしていることから、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークと協同して古文書の保全活動を実施した。その結果、上記の調査とは別に3件の古文書資料を保全することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

(1) 佐藤大介「明治初年の奥羽横断道路－関山隧道への道」、査読無、『市史せんだい』20、2010年、35-50頁。

(2) 佐藤大介「海の「郷土」と地域社会－仙台領桃生郡名振浜・永沼丈作の軌跡－」、査読無、斎藤善之・高橋美貴編『近世南三陸の海村社会と海商』清文堂出版、2010年、255-312頁。

(3) 佐藤大介「天保飢饉からの復興と藩官僚－仙台藩士荒井東吾「民間盛衰記」の分析

から－」、査読有、『東北アジア研究』14、2010年、59-96頁。

(4) 佐藤大介「さむらい達の大保飢饉－天保四・五年飢饉と藩士・藩官僚」 査読無、『国史談話会雑誌』50、2010年、249-264頁。

(5) 佐藤大介「「二度目の震災」から一年－岩手・宮城内陸地震での歴史資料保全活動の成果と課題」、査読無、『地方史研究』340号、2009年、63-66頁。

(6) 佐藤大介「岩手・宮城内陸地震における歴史資料保全活動－「二度目の震災」にどう対応したか－」、査読無、『災害と史料』3号、2009年、1-11頁

(7) 佐藤大介「仙台藩の献金百姓と領主・地域社会」、査読有、『東北アジア研究』13号、2009年、57-81頁。

〔学会発表〕(計9件)

(1) 佐藤大介「地域復興と「理想郷」建設－仙台領加美郡小野本郷原町・池田伊兵衛の書物受容と社会活動」、第62回「書物・出版と社会変容」研究会、2011年2月5日、一橋大学佐野書院。

(2) 佐藤大介「歴史学における過去の清算－宮城版「古文書返却の旅」、シンポジウム「歴史遺産を未来へ」、2010年11月13日、東北大学川内萩ホール

(3) 佐藤大介「東北大学附属図書館準貴重書庫の仙台藩関係資料－概要と展望－」、第2回・仙台藩研究会、2010年7月10日、東北大学金属材料研究所講堂。

(4) 佐藤大介「幕末の通町 東昌寺門前・菊田源兵衛家とその周辺」、連続講座「通町・堤町・北山界隈の歴史を探る」、2010年7月9日、仙台市青葉区柏木・満照寺。

(5) 佐藤大介「関山隧道への道－明治初年の奥羽横断道路構想」、仙台市史講座、2009年10月17日、仙台市・宮城西市民センター。

(6) 佐藤大介「仙台藩の洋式艦船と交易構想」、東北史学会大会、2009年10月4日、東北大学大学院文学研究科。

(7) 佐藤大介「「宮城方式」での歴史資料保全技術－「千年後に史料を残す」ための第一歩－」、歴史資料ネットワークシンポジウム、2009年7月27日、神戸市・六甲道勤労市民センター。

(8) 佐藤大介「さむらい達の天保飢饉－仙台藩官僚と危機管理」、国史談話会大会、2009年6月13日、東北大学大学院文学研究科。

(9) 佐藤大介「岩手・宮城内陸地震における歴史資料保全活動－「二度目の震災」にどう対応したか－」、シンポジウム「震災資料と復興・市民参加」、2008年12月6日、新潟大学総合教育研究棟D棟1F大会議室。

[図書] (計1件)

(1) 佐藤大介『18～19世紀仙台藩の災害と社会 別所万右衛門記録』、査読無、東北大学東北アジア研究センター叢書37集、2010年、371頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 大介 (SATO DAISUKE)
東北大学・東北アジア研究センター・助教
研究者番号：50374802

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし